

《報告》

ゲンジボタル和名考～江戸文学の視点から～

後藤好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

日本を代表するホタル2種 *Luciola curciata*, *Luciola (=Aquatica) lateralis* には、それぞれゲンジボタル、ヘイケボタルの和名が与えられている。日本産の昆虫でゲンジ○○*¹・ヘイケ○○と名付けられた例は他になく(九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター, 1989), 珍しい付け方である。小西(1999)によると, 図鑑でゲンジボタルとヘイケボタルを学名とともに図示したのは, 松村松年の『日本千虫図解』第3巻(1906年刊)が最初であるという。この図鑑ではゲンジボタルに「一名おほぼたる」と, ヘイケボタルに「一名ひめぼたる」と記されている。昆虫に限らず生物の和名では, ヒメは小型の種に使われる接頭語で, ギフチョウに対して小型のヒメギフチョウなどの例がある。もし大小2種のホタルに和名をつけるのであれば, 松村のようにオオボタル・ヒメボタルとするか, 代表種としてのゲンジボタルを単にホタル*²とし, 小型の種にヒメボタル*³と名付けるのが普通である。

ゲンジ(源氏)とヘイケ(平家)は対となる語であることから, 大型のホタルにゲンジボタルの名が付けられた後に, ゲンジボタルよりも小型で光も弱いホタルに, 治承・寿永の争乱(源平合戦)で源氏に破れた平家の名を付けたと考えている人が多い。一方, ゲンジボタルの名称がどのようにして付けられたかについては, 諸説唱えられているもののいまだ定説はない。

本報では江戸時代の文学, 主に俳諧(雑俳・川柳を含む)や狂歌において, ホタルを源氏と結び付けていた事例を探り, 和名の語源について考察するとともに, 江戸時代にゲンジボタルの呼称が存在していたのか検討してみたい。

なお, 引用した作品は出典によって翻刻の程度が異なるが, カナ・踊り字(くはへと表記)はそのままとし, 漢字は原則として通行の字体に改めた(ただし, ホタルは「螢」に統一)。また雑俳の前句付・冠付の題は△で示した。

ゲンジボタルの和名語源説

ゲンジボタルの語源については以下の5つの説がみられる。

(1) 顕示説

ホタルは闇の中で光るので, 誰の目にもはっきり見える「顕示」という意味からゲンジになった, という説で, 三石(1990, 2002), 荒俣(1991), 柴田(2003)で触れられている。荒俣は三石(1990)からの引用であるが, 柴田については文献は示されていない。

三石(1990, 2002)も「...という考え方をする人もいる」「...という説などがあります」と他からの引用のようであるが, いずれも文献が記されておらず, 神田(1935)以降の主なホタル関係の文献にも見当たらないので原出典は不明である。

顕示は顕示欲, 自己顕示などの熟語で耳にすることが多い言葉だが, 小学館の『日本国語大辞典第二版』を引くと「仏が因果などの法を, ことばなどではっきり教えること。また, 一般に, はっきりと, あらわ

し示すこと、目立つようにすること」とあり、元は仏教用語のようである。顕示の読み方は「ケンジ」であり、ケンジボタルがゲンジボタルへと頭の音が濁音化したとは考えにくいので、やはり語源としては弱いであろう。また、“闇の中ではっきりと光が見える”という特徴は、ゲンジボタルというよりもホタルの特徴と捉える方が自然であるので、ゲンジボタルの語源とするのには無理があるように思える。

(2) 山伏説（験師説）

民俗学者の柳田國男は『螻蛄考』（1969）^{*4}で、ゲンジボタルの語源について次のように記している。

常陸国誌にはゲンザッポウは蜻蛉の小さきものとある。然るに近江滋賀郡の鵜川村などでは、最も大きな蜻蛉をゲンジといふのである。螢なども一種大形の光る部分に横筋のあるものを、ゲンジと謂ふ地方は多い。字にはよく源氏螢と書いて居るけれども、それは理由の無いことである。児童の螢捕りの唄は各地で一様でないが、多くは、

ほうたる来い、山ぶし来い

又は山吹来いへとも歌って居る。其山吹もしくは山臥が、右にいふゲンジ螢のこたらしくて、しかも誰もまだどうしてさう謂ふかは考へて居なかつた。沖縄県でも宮古の諸島だけは、螢をヤンプ又はエンブという語があるから、或いは別の説明も付くかも知れぬ。しかし自分のみはゲンジ（験師）^{*5}だから即ち山伏ともいふので、何かは知らずこの大形の螢だけに、一種の力を感じて居た名残かと思つて居る。蜻蛉のゲンザに至つては、殊に験者という名称の依り所があつたと思ふ。験者とは修験者、祈禱師又は魔術師を意味して、古く俗間にも用いられた語である。

国文学者・民俗学者の高崎正秀も『古語雑俎』に、「源氏はすなはち験師であり、験者といふことから来てゐたのである」と述べ（高崎、1985）^{*6}、柳田説を踏襲している。

柳田の説に対し発光生物研究家であった神田左京はその著書『ホタル』の中で、ゲンジと呼ぶ地方は近代に入って学校の教師によって教えられた結果とし、また、山伏は「験者（ゲンザ／ゲンジャ）」あるいは「修験者」と呼ぶのが正しいと指摘している（神田、1935）。たしかに国語辞典や古語辞典に当たってみても験師という用例は見当たらない。

昆虫文化史家の小西正泰は「私見では、この説は民俗学者としての付会ではないかと思う（小西、1999）」と述べている。また、昆虫学者の矢島稔も「山伏説では、それがなぜ「源氏」と書き表わすようになったのか説明できません（矢島、1978）」と疑問を呈している。

(3) 源氏物語説

神田（1935）は

かぶり火も螢もひかる源氏哉

尻は猶源氏といはん螢哉

の俳諧発句を、紫式部の『源氏物語』の主人公光源氏に掛けた句とし、また、

螢火は我居所のあかし哉

の句に添えられている「源氏螢卷」という前書が“源氏螢”と文字に表された最初とし、『源氏物語』から出たという説を唱えている。ただし、当時『源氏物語』は「源氏」と略称されることも多く、この前書は「源氏物語螢卷」の意であることから、直接ゲンジボタルという名に結び付くわけではない。

さらに、平家とホタルが結び付けられた句として

夏の夜は螢も照す平家哉 光有

をあげ、この句のホタルは源氏螢を暗示し、平屋（ヒラヤ）を平家に掛けたという解釈を紹介している。

神田は最後に「以上のゲンジボタル、ヘイケボタルの名の生れた過程わまったく私の想像に過ぎません。

ほかに違った古事があるならどおか教えてください」と、自信をもって文を結んでいるが、アニメ編集部(1979)は「柳田国男の験師説、神田左京の光る源氏説などさまざまである。しかし、どれとってたいした根拠はなく、語呂あわせの感がつよい(傍点ママ)」と、柴田(2003)は「語源は『源氏物語』の主人公、光源氏に由来するといわれるが、いかにも安直である」と批判している。一方、矢島(1978)は「いかにも連想ゲーム的でおかしいのですが、名前というのは案外そのようにしてついていくのかもしれない」と肯定的に述べている。

(4) 源頼政亡魂説

源頼政(1104～1180)は清和源氏の庶流、摂津源氏の武将で、歌道にも造詣が深かった。美福門院に近かった頼政は、保元の乱・平治の乱では平清盛方となり、平家政権下で源氏の長老として中央政権に留まった。1180年に似仁王の平家追討計画が平家方に洩れると、似仁王は園城寺に籠もり、頼政は自邸を焼き払って似仁王と合流する。しかし、頼みにしていた山門(比叡山延暦寺)が中立を保ったため、興福寺を頼って南都(奈良)へ移動する途中、宇治平等院で休息しているところを平家方の追討軍に追いつかれ、宇治橋を挟んでの合戦となり、最後は平等院で自刃して果てた。宇治川のホタルには、頼政の亡魂がホタルと化し、今ひとたび合戦を行っているという伝説が生まれた。神田(1935)は、この伝説を源氏とホタルが結びついた暗示になると述べている。

頼政の伝説を語源とする説は、小沢(1972)、柴田(2003)に取り上げられているが、特に柴田は山伏説、顕示説を「いずれも平家に関連する理由がなく、説得力に乏しい」とし、この説を「宇治平等院の悲劇が螢合戦を連想させ、源平合戦へと発展しゲンジンボタルとヘイケボタルの名を生んだ」と評価している。

(5) 螢合戦説

小西(1999)は神田の源氏物語説を紹介した後で、「往時はホタルが川の上で集団群飛するのを「螢合戦」と呼び、これを源平の合戦に見立てたということも考えられる」と、螢合戦が語源である可能性についても示唆している。この説は古く、ジャーナリスト・著作者・文化史家等として知られる宮武外骨の著書『面白半分』の「螢合戦は恋の争い」の文中に、「此美観を螢合戦と称し随つて源氏螢、平家螢の名も出来たのであるが(宮武, 1923)*⁷」とある。また、平凡社刊『世界大百科事典(改訂版)』の〔ホタル・民俗〕の項には「ホタルの大きいものを源氏螢、小さいものを平家螢というのは螢が乱舞する様子を螢合戦とよんで合戦にみたてたところから出たらしく(千葉, 2005)」と、東京堂出版刊『民俗辞典』の〔螢狩〕の項でも「戦国時代には、螢が交尾のために入り乱れて飛びかうさまを螢合戦といっているが、源氏螢・平家螢の名はここからでたものであろう(森末, 1957)」と、それぞれ螢合戦を名前の由来としている。

この説は、螢合戦を源平争乱になぞらえることにより、ゲンジボタルだけでなくヘイケボタルの名の由来を説明できるという利点がある。しかし、螢合戦を戦国時代の合戦で亡くなった武将や兵士の亡魂とする地方も少なくなく、源平の合戦に見立てたとするだけではやや説得力にかけらるきらいがある。

近世の文学における源氏とホタルの結びつき

上記5つの語源説は、いずれも決定的となる根拠はないものの、他に有力な説が無いのも事実である。筆者は顕示説・山伏説・螢合戦説には否定的であり、源氏物語説と源頼政亡魂説を評価しているが、その根拠となっているのは江戸時代の文学である。ここでは、江戸時代の文学から、当時の人々がホタルと源氏を結びつけた作品について、少し詳しく見てみたい。

(1) 源氏物語

近世にはいると印刷技術の進歩により古典の板本が出版され、それまで貴族などの上層階級や一部の文人のものであった古典が民衆に解放された。『源氏物語』もそのひとつであり、庶民は紫式部の原文を読めるようになるとともに、北村季吟の『湖月抄』や野々口立圃の『おさな源氏』など注釈書や梗概書でも源氏の世界に触れられるようになる。この結果、『源氏物語』はさまざまなジャンルで民衆レベルへと受容されることになった。

a. 尻は猶源氏といはん螢哉 『毛吹草』(1645〈正保2〉年刊, 松江重頼編著)

b. 螢

鼻の先へ尻持て来るは慮外なれとひかる源氏の影もなつかし

淵龍『狂歌花の友』(1793〈寛政5〉年刊, 前川朝宗撰)

ホタルの発光器は腹部第5・6節目にあり、昔から尻が光ると表現される。aは「お尻が光っているホタルは、今も変わらずひかる源氏と主張していることよ」、bは「私の鼻先にお尻を持って来るとは無礼だが、光っているお尻はひかる源氏の物語を思い起こさせて懐かしいことだ」の意。ともに尻が光ることと『源氏物語』の主人公“光(ひかる)源氏”を掛けて詠んでいる。

c. 篝火も螢もひかる源氏かな 親重『犬子集』(1633〈寛永10〉年自序, 松江重頼編)

aの句とともに、神田(1935)が源氏物語説の根拠にあげた俳諧発句のひとつ。句意は「篝火も螢も光るものだが、光源氏の物語の巻の名でもある」で、ここでもホタルの光が“光源氏”に掛けられている。作者は野々口立圃で、親重は諱である。

d. 螢に心飛ちらず巻に成り 『誹風柳多留』51篇(1811〈文化8〉年刊)

e. 螢の巻ハ宵闇の頃に書キ 『誹風柳多留』114篇(1831〈天保2〉年刊)

f. 螢の巻ハ近所からおもひ付 『柳樽余稿 川傍柳』2篇(1781〈天明1〉年刊)

紫式部が石山寺に籠もって『源氏物語』を書いたという伝説は、中世には一般化していた。d～fは石山寺創作伝説と、石山の地が古くからのホタルの名所であったことを踏まえて詠まれている。

dはホタルの美しさに気を取られることなく、執筆に専念したため〈螢の巻〉が成ったと、eは〈螢の巻〉はホタルが飛び出す宵闇の頃に書かれたと、fは〈螢の巻〉は石山寺のすぐ近くにある名所を飛ぶホタルから思いついたと詠む。

g. 婦人螢狩

石山に源氏の巻の螢狩式部の跡や追ふ女房たち 吐楽『和哥夷』(1803〈享和3〉年序跋, 永田貞也編)

「螢の名所である石山で、源氏物語の巻の名でもある螢狩に女房達が興じている。石山寺で源氏を書いた紫式部の魂は成仏できないでいるというが、女房達はその式部の靈魂の化したホタルを追っているのだろう」の意。『宝物集』には「紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけり」とある。また、謡曲『源氏供養』やその典拠となった御伽草紙『源氏供養草子』では、式部が光源氏の供養を怠った罪で成仏できずにいるとするので、この歌はホタルを式

部の魂に見立てていると考えられる。

- h. 一帖ハ螢に光るものがたり 『誹風柳多留』44 篇 (1808 (文化5) 年刊)
- i. 宇治の螢がそれて来て巻に成 『誹風柳多留』50 篇 (1811 (文化8) 年刊)
- j. 影光る源氏の巻の名によへと宇治の螢は十帖の外 季隆『狂歌千種園』(1815 (文化12) 年刊, 繁雅撰)
- k. 螢見や是も源氏のまきの嶋 朋之『佐夜中山集』(1644 (寛文4) 年自跋, 松江重頼編)
- l. 夏虫はひかる源氏の巻ならて横たてに飛ふ中河の水 外山松人『狂歌東西集』(1798 (寛政10) 年刊, 千秋庵三陀羅法師編)

ともに『源氏物語』の“螢”という巻の名を踏まえる。

小沢 (1972) は i の句の「巻」を『宇治拾遺物語』と解釈しているが、同書の説話でホタルに関係するのは巻第十二 (東人歌詠心事) の 1 編だけであり、また「それて来て巻に成」の表現にもそぐわない。この句はやはり『源氏物語』と解釈するほうが妥当であろう。

j は「宇治で飛びながら光るホタルは『源氏物語』の巻の名になっているが、宇治十帖の外だ」と詠んでいる。宇治十帖は橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋の各巻のこと。k の槇島は、『都名所図絵』に描かれた図を見ると宇治橋のやや下流にある中洲で、江戸時代の宇治十二景に“槇島瀑布”として扱われていた (宗政, 1997)。宇治の螢見との縁で、『源氏物語』螢の巻を宇治の槇島に言い掛けている。l の夏虫は火取蛾を指すことも多いが、ここではホタルのことである。

- m. 螢火で撫子見せよしんのやみ 重頼『犬子集』
- n. 源氏もやひかるほたるの兵部卿 徳元『塵塚誹諧集』(1633 (寛永10) 年成, 斎藤徳元著)
- o. 古双紙螢みたるゝ源氏かな 秀綱『点滴集』(1680 (延宝8) 年刊, 編者未詳)
- p. 螢火で見るは車胤と兵部卿 『誹風柳多留』91 篇 (1826 (文政9) 年刊)
- q. 昼ハ寝て夜ハ螢の兵部卿 『誹風柳多留』122 篇 (1833 (天保4) 年刊)
- r. 玉かつらくるゝ夜毎にみだるゝはこれやほたるの兵部卿殿 貞徳『興歌老の胡馬』(1751 (宝暦1) 年序, 九如館鈍永撰)

〈螢の巻〉の前半は、源氏の放ったホタルに光で映し出された玉鬘の容姿を見て、螢兵部卿宮 (源氏の弟) が恋のとりことなる話だが、m～r の俳諧・狂歌はこの物語を踏まえて詠まれたものである。

m は「螢火の明かりで闇の中の撫子の姿を見せてくれ」の意。撫子は玉鬘のことで、玉鬘は〈常夏の巻〉で撫子に喩えられている。p はホタルの光を明かりにして見たのは、螢雪の功の故事で有名な晋の車胤と兵部卿宮だと詠み、q は夜忍んでいく兵部卿宮を、夜になると現れるホタルの生態に掛けている。r の作者、松永貞徳は江戸時代初期の俳人・歌人・歌学者で、晩年には狂歌もたしなんだ。

- s. 螢飛ぶ瀬田行く人も玉かづら 『誹諧鱷』11 篇 (1792 (寛政4) 年序)

瀬田は宇治とともに古くからホタルの名所として知られ、多くの人が訪れた。瀬田の道行く人が無数のホタルに照らされているのは、まるで『源氏物語』の玉鬘のようである。

- t. 須磨の浦や今は螢を光君 如雲『時勢粧』(1672 (寛文12) 年刊, 松江重頼編)

失脚して都を退去した光源氏は須磨に住む〈須磨の巻〉。この句はこれを踏まえ、「昔、光源氏が住んでいた須磨の浦は、今では変わってホタルが光る君だ」と詠んでいる。

u. 螢籠惟光是へ召されけり

一茶「八番日記」(1819-21〈文政2-4〉年の句稿)

惟光は光源氏の乳兄弟で、須磨にも源氏に随って赴いた腹心の家来である。この句は、玉鬘への悪戯を思いついた源氏が惟光を召し寄せて螢籠を渡し、「これにホタルをたくさん捕まえてきてくれ」と命じようとしているところ。自身も中級貴族であった惟光は、〈螢の巻〉の頃は源氏の引き立てで参議にまで昇っていたので、実際の物語の中では起こりえない場面だが、一茶はこのようなことを頼めるのは源氏が信頼を寄せる惟光であったろうと想像を膨らませている。

v. △螢に 紫式部歌を読

「勢南山田 冠勝句」(一枚摺綴合一冊, 1771〈明和8〉年成)

『新編国歌大観』の「紫式部集」にはホタルを詠んだ歌はないので、この付句でいう歌は〈螢の巻〉で螢兵部卿が玉鬘に贈った歌「なく声もきえぬ虫の思ひだに人の消つにはきゆるものかは」に対し、玉鬘の返した歌「こゑはせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ」のことであろう。

『源氏物語』の中でもホタルの光で玉鬘の容姿を浮かび上がらせるシーンは、江戸時代の人々にとっても印象深いもののひとつだったに違いない。

w. 翠簾へ来て螢の遊ぶ八の宮

『誹諧觴』6篇(1781〈天明1〉年刊)

八の宮は源氏の異母弟であるが、十の宮(源氏の異母弟、その実源氏と藤壺の女御との間の子で、後の冷泉帝)との東宮争いに利用されたため、源氏の栄華の影でひっそりと生活していた。宇治十帖の大君・中君・浮舟の父親で、都の邸が火事で焼失した後、宇治の山荘で暮らす。

x. 螢狩にも出ず浮舟

『誹諧觴』6篇

浮舟は宇治に住んでいたが、螢狩に出かけた話は描かれていない。〈夢浮橋の巻〉では小野の里に隠棲する浮舟がホタルを見て「昔おぼゆる慰めにて眺めみ給へるに」と回想するが、“昔”を宇治でホタルを見たとする解釈に対して、北村季吟は注釈書『湖月抄』の「やりみづのほたるばかりを」に「宇治にて見給ひしなどいふ説如何手習君は宇治にて夏を過し給ふ事なし」と傍注を付けている。この句はこれを踏まえた。

y. 名のいりし源氏の恩やわすれけむ光を尻にしける螢は

柳原向『古今狂歌袋』(1787〈天明7〉年刊, 宿屋飯盛撰)

「名の入りし」は源氏の名が入った“源氏螢”ではなく、『源氏物語』に巻の名として入った“螢”と解釈するべきであろう。歌意は『源氏物語』に巻の名として入ったホタルは、その恩を忘れたのだろう。光源氏を尻に敷いて、光を繁く明滅させている」であるが、さらに「名の入りし源氏」を源氏名として遊女*⁸の意味を持たせているか。

【猿源氏草紙】

『猿源氏草子』は室町時代の成立と推定されている、歌の徳を語るという歌物語風の御伽草子である。内容は以下の通り。賤しい鬻売“猿源氏”が美しい遊女“螢火”を見初める。東国の大名宇都宮弾正に成り済まして一夜を共にするものの、売り声の「阿漕が浦の猿源氏が鬻買ふゑい」という寝言を聞きとがめられる。螢火に次々と詰問される猿源氏は、その都度和歌や連歌、説話などを引いて言い抜け、最後は首尾よく結ばれる。主人公の猿源氏の名は、滑稽な印象を与える「猿」と、貴公子の代表に当たる「源氏」とを組み合わせたもの（大島、1974）であるが、猿源氏が見初める遊女の名を「螢火」としたのは、やはり『源氏物語』が念頭にあったであろう。『猿源氏草紙』は江戸時代中期に他の御伽草子 22 編とともに「御伽文庫」あるいは「御伽草子」という名で刊行されており、広く読まれたと考えられる。

(2) 源頼政の伝説

源頼政の霊がホタルとなって今一度平家と戦っているという伝説がいつ頃生まれたのかは不明であるが、この伝説が文献に現れるのは筆者の知る限りでは江戸時代前期の仮名草子『狂歌咄』（浅井了意作、1672〈寛文 12〉年刊）が初出のようである。さらに了意は『狗張子』（1692〈元禄 5〉年刊）で、また、寺島良安は『和漢三才図絵』（1712〈正徳 2〉年成）でこの伝説に触れている。江戸時代後期になっても速見春暁斎の『諸国図絵年中行事大成』（1806〈文化 3〉年刊）に取り上げられているし、喜多村信節は『嬉遊笑覧』（1830〈文政 13〉年自序）で『狂歌咄』を引用して紹介している。

a. △浪打隈に螢乱るゝ

今の世もほむらを残す源三位

『誹諧口三味線』（1702〈元禄 15〉年序）

1178（治承 2）年、頼政は清盛の推挙により従三位に叙せられた。それまで清和源氏は正四位下が最高位であり、この昇進は破格の扱いとして捉えられ、頼政は源三位げんさんみと称されることになる。

b. 宇治にて螢

宇治川に名をのこしたるものふ武士の小尻は今にひかるなりけり

其『狂歌やまと拾遺』（1741〈寛保 1〉年刊、田中其翁編）

bは「昔宇治川の戦いで名を残した武士は、今はホタルとなって小尻を光らせている事よ」の意。この狂歌には頼政を暗示する語は見られない。しかし、京への要衝の地である宇治橋周辺の宇治川では、佐々木三郎と梶原源太の先陣争いで有名な木曾義仲と源義経の戦いや、承久の乱での上皇軍と鎌倉幕府軍の戦いがよく知られているものの、頼政以外には宇治の螢合戦に擬している例はないので、この狂歌も頼政の伝説を踏まえていると見てよかろう。

c. 火花ちらす宇治の螢や宮いくさ

實信『鷹筑波』（1642〈寛永 19〉年刊、山本西武編）

d. △はや入相の鐘をつき出ス

高倉の宮様螢ちいそうて

『海音等前句付集（仮題）』（1718〈享保 3〉年刊、海音・文流・尺有本の合綴本）

宮戦は皇族が戦をすること、あるいは皇族をいただいた戦いで、謡曲『頼政』の「いにしへにこの所に宮戦のありし時」を踏まえ、この句の螢も似仁王の令旨により挙兵した頼政のことである。cの高倉の宮は

似仁王のこと。似仁王は後白河院の皇子で、高倉宮の呼び名は母藤原成子が、住んでいた三條高倉殿から高倉局と称されたことによる。

e. かしこさに合戦なしに飛螢 許六『韻塞』(1696〈元禄9〉年刊, 李由・許六編)

前書に「宇治川の螢は、昔日三位入道の亡魂なりといひつたふ。今の世は」とある。「昔は合戦が行われた宇治川も、今でははかしこいホタルが、火花ならぬ光を放ちながら飛び交っているだけだ」の意。許六は彦根藩井伊家の家臣で、芭蕉の門人。

f. 平等院へ負ほたる飛ふ 、『誹諧武玉川』11篇(1757〈宝暦7〉年刊)

g. ほたるさへまけて平等院へにげ 、『誹風柳多留拾遺』6篇(1801〈享和1〉年刊)

h. 一備平等院に飛ぶほたる 、『誹諧觸』6篇

i. 螢照行厨

平等院ちかく螢にひかれ来て扇の形のさゝへいのちしや

華産『狂歌栗下草』(1792〈寛政4〉年刊, 岫雲亭華産撰)

平等院は頼政一行が園城寺から南都へ落ちる途中に休息した場所で、平家に敗れた頼政は平等院に退いた。gの一備は軍勢の一部隊のこと。

j. はらふなよ扇の芝に飛螢 重頼『犬子集』

k. 螢火や扇の芝の銀かなめ 盛廣『佐夜中山集』

l. 螢火やあふきの芝の草のかけ 正吉『佐夜中山集』

m. 此芝を火扇となすほたる哉 可常『続山井』(1667〈寛文7〉年刊, 北村湖春編)

n. 頼政の扇に夜るの金砂子 、『誹風柳多留』43篇(1808〈文化5〉年刊)

o. 扇の芝へ敗軍の螢来る 、『誹風柳多留』72篇(1820〈文政3〉年刊?)

p. △ばりへとへ

ほたる火の治承を灯すうちの芝 、『俳諧時雨笠』(1723〈享保8〉年刊)

q. 川螢

宇治川に光る螢は天地金あふきの芝のかなめとそ見る 稲穂波『狂歌東西集』

r. 古戦場ノ螢

宇治川に流るゝほたる打集め見るは軽羅の扇の芝かや

木端『狂歌かゝみやま』(1758〈宝暦8〉年刊, 栗柯亭木端編)

宇治平等院には扇を拵げたような形をした「扇の芝」と呼ばれる芝生があるが、これは平等院に退いた頼政が芝の上に扇を敷き、その上で自刃したという伝承に基づく*9。jからrまではこの伝承と頼政の亡魂伝説を踏まえ、ホタルと扇の芝を結びつけて詠まれたもの。

nはホタルの光を大和絵などで散らされる金砂子に見立て、金砂子をホタルの意で用いている。oは扇の芝辺りを飛び交っているホタルを、平家に破れて平等院へ逃げてきた頼政とした。pの治承はこの戦いの起きた年の元号で、飛び交うホタルを宇治川の戦いの再現と見る。qの天地金は扇の地紙の上部と下部が金箔のもので、祝儀の時などに用いられた。宇治川のホタルを扇の天に見立てる。rの軽羅の扇は、中国の中唐の詩人王建の詩「宮詞」〈銀燭秋光冷画屏／軽羅小扇撲流螢／玉階夜色涼如水／臥看牽牛織女星〉

を踏まえたもので、この詩は南宋で編集された唐詩撰集『三体詩』によって日本でも広く知られるようになり、“小扇撲螢”の歌題は近世には和歌で詠まれるようになった（鈴木、1996）。

s. おなじく宇治にて
うぢうちとよりまさりては飛螢いくさのがまんくち果ずして
友房『狂歌活玉集』（1740〈元文5〉年刊、法橋契因編）

t. 水辺螢
宇治川やまねく扇の芝舟によりまさりくる夏虫のかけ
為丸『狂歌浜荻集』（1812〈文化9〉年刊、便々館湖鯉鮒編）

s・tの狂歌には頼政の名（傍点引用者）が詠み込まれている。

【螢狩 宇治奇聞】

1813（文化10）年に刊行された読本『宇治奇聞』（五島清通作、一峯齋馬円画）は、岩城家のお家騒動を描いた作品。宇治に螢狩に訪れた岩城元信は、帰城の途中にのどの渇きを覚え近くの家立ち寄り、源頼政の末裔である家の主、生駒佐右衛門の人柄を見初めて家臣とする。佐右衛門は岩城家が鎌倉より預かっていた霊剣を盗まれた責めを負って自害するが、その霊魂は大内政直の家臣萩坂源五兵衛の次男主税に宿り、主税は元信の子左馬介を助けるために旅立つ。最後は主税らの活躍に佐右衛門の霊も加わり悪人を退治、左馬介は無事岩城家を相続する。

この作品も、生駒佐右衛門が頼政の後裔とされていることや、元信が宇治に螢狩に出かけて佐右衛門を見出すこと、霊剣を取り戻した主税が敵に襲われた時に頼政の霊がホタルに化して助力するなど、頼政の伝説を取り入れている。

【頼政追善芝】

西沢一風・田中千柳作の人形浄瑠璃、初演は1724（享保9）年2月1日の大坂・豊竹座。初段から四段は安徳天皇即位から頼政の自刃までを描く。五段は「あやめの前道行」と「宇治八景」からなる。頼政自刃から百ヶ日、宇治を目指すあやめの前*¹⁰は、途中猪早太*¹¹夫婦と出会い、その舟で宇治の里まで行く。宇治橋のほとりに舟を繋いだあやめの前達の前に、突然武者の幻影が現れ宇治の合戦を再現する。

程もうつさず。物すごくかさねてひびく太鼓の音。すは又しゆらの時来ぬとさげぶや声へにありしすがたはきへへと。身より出せる其のひかりしやりんのごとくまよふと見へし。ほたと成つてはつとちり。山野にへんまんかすい河水に流れ。みだれみだるゝ其の中に。主長と見へたる大ほたる。ふしぎやくるしき声を出し。

やがて武者の幻影はホタルとなって散っていくが、その中でもひととき大きなホタルが頼政の化身で、あやめの前達に思いを告げると、やがて夜明けとともに消えていった。

この五段「宇治八景」は、頼政の亡魂伝説を下敷きに書かれていることは間違いない。この浄瑠璃は1728（享保13）年頃、「頼政扇子芝」と改題し再演され、さらに1751（宝暦1）年7月15日からの再演も知られている。

また、1745（延享2）年7月、大坂・中村十蔵座で公演された歌舞伎に、「平等院螢戦」（別題「平等院螢合戦」）がある。芝居の内容については不明だが、外題から推測して頼政の亡魂伝説を踏まえて作られたのではないかと思われる。

(3) 源頼光

1729（享保14）年に刊行された安勝子（本多月楽）の『虫合戦物語』は、美しい玉虫姫を巡って螢の君

と土蜘蛛が争い、最後にはホタルが勝者になるという浮世草子である。螢の君は源頼光をモデルに描かれており、家来には頼光四天王をモデルにした渡辺の源五郎虫（渡辺綱）、坂田の井守（坂田金時）、うすいの箴虫（碓井貞光）、浦部のすゞむし（卜部季武）や平井の火取虫（平井保昌^{*12}）がおり、土蜘蛛との戦いには「土蜘蛛退治」「酒呑童子」の説話が用いられている。頼光は摂津源氏の祖^{*13}で、御伽草子・仮名草子や謡曲、浄瑠璃等を通して広く知られた存在であった。

同じような作品は咄本『虫合戦獣鳥の助太刀』（十返舎一九作、刊行年未詳）や『武蔵野虫合戦』（松有慶作、自筆稿本のみ）がある。小西（1997）は、これらの作品でホタルが恋の勝者となる主人公であることについて、「ホタルは（色男ならぬ）「色虫」として描かれており、得な役回りです。美男の「光源氏」（ひかる君）からの連想でしょうか」と述べているが、『虫合戦物語』には螢の君について「光る源氏の古の、螢の巻に心をよせ」とあるので、光源氏も意識して書かれたのではないだろうか。

『虫合戦物語』は『浅茅草』『御伽夜話』『蜘蛛夜話』の別題を含め、1746（延享3）年・1798（寛永10）年・1853（嘉永7）年にも刊行されている。

このように、江戸時代の文学、特に俳諧や雑俳・川柳、狂歌では、『源氏物語』や頼政の亡魂伝説を踏まえてホタルと源氏を結び付けた作品が数多く残されており、制作年代も江戸時代前期から後期にわたっている。また、少ないながらもホタルを源頼光になぞらえた作品も見られた。

こうした作品は作者に教養も必要だが、広く受け入れられるためには読み手が理解するだけの素養が無ければならない。近世文学を専攻とする棚橋政博は、「江戸っ子」たちは知識階級というほどのインテリジェンスは持ちあわせていなくとも、寺子屋リテラシー（読み書き能力）程度は身につけて、川柳を楽しみにするには十分な素養の持ち主が増えた。そうした町人階級が本格的に読書を楽しむようになったのも宝暦以降のこと」と述べており（棚橋、2013）、江戸中期以降、三都や名古屋などの都市部の町民を中心として、こうした作品を理解できるだけの素養を身につけた人が増え、ホタルと源氏が重ね合わされたイメージも文人から庶民に広がっていったと考えられる。

江戸時代にゲンジボタルという呼び名はあったか

近代生物学で使用されている和名は、おもに江戸時代に一般的な語彙として使用されていた名称や、地方名として使われていた名称を採用した場合、研究者等が新たに考案した場合がある。ではゲンジボタル・ヘイケボタルという名称はいつ頃発生したのだろうか。

その時期について南（1961）は、「江戸時代には既にゲンジボタル、ヘイケボタルの呼名があったことは事実である」とする。また、小沢（1972）は「前述のように、江戸時代の俳句などから推察するに、それはたとえごく一部の限られた人たちであったにせよ、少なくとも江戸時代にはすでにゲンジボタル、ヘイケボタルの名はあって使われていたと考えていいのではないかと思う」と限定的ではあるが、ゲンジ・ヘイケという呼称があったという見解を示している。

それに対して三石は「以上から、「源氏螢」というよび名は、江戸時代にはすでに一般の人達の間にも広く使われていたようである（三石、1990）」とゲンジボタルの名が江戸時代には一般化していたとし、さらに「江戸時代には既にゲンジボタル、ヘイケボタルという呼び名が一般的になっていたということが考えられます（三石、2002）」と両者の呼称が広く使われていたとしている。また、柴田（2003）も「江戸時代中期にはそれぞれの呼称が一般的になったと思われる」と同様の見解をとっている。（傍点いずれも引用者）

しかし、三石も柴田も推測にすぎず、具体的にゲンジボタル・ヘイケボタルの呼称が使われた例は示されていない。また、江戸時代末期に著された虫譜類にもこうした呼称は見られず、その他の文献からも報

告はない。したがって、三石や柴田の主張するように、江戸時代に一般的な呼称として使われていたとは考えられない。

南・小沢・三石がゲンジボタル・ヘイケボタルの呼称があったと主張する根拠となっているのは、神田(1935)の和名の語源に関する考証であるが、特にヘイケボタルについては次の句の存在が大きい。

夏の夜は螢も照す平家哉

この句の“平家”を「ヒラヤ」と「ヘイケ」に掛け、ホタルを平家と結びつけた句と考えることにより、両者の名称があったと見ているのである。特に小沢はこの句について、「ゲンジボタルがヘイケボタルを照らすといった工夫が見られ(小沢, 1972)」とも評している。しかし、『毛吹草』に採られた句は

夏の夜は螢も照す平砂かな(傍点引用者)

である^{*14}。“平砂”は“平沙”のことで、ちっぽけなホタルが平坦で広大な砂原を照らす滑稽味を詠んだ貞門俳諧らしい句である。南らはいずれも神田(1935)が揚げた句をそのまま引用したと思われるが、神田はなぜこの句を“平砂”ではなく“平家”と記したのだろうか。

神田が参考にしていただかしい文献は、正岡子規編集の『分類俳句全集』^{*15}である。これは江戸時代以前の発句を季題・内容(題材)ごとに分類したもので、1928～29(昭和3～4)年にかけて北原白秋の弟、北原鐵雄が創立したアルスから刊行されている。この全集の5巻「夏の部・螢」には

夏の夜は螢も照す平家哉 光有(毛吹草)

とあり、神田はこれをそのまま引用していたということであろう。なお、『分類俳句全集』で平砂が平家となった経緯については不明である。

平家とホタルが結びつけられたと考えられた句が他に存在しない以上、南らの論は根拠が薄弱となり、江戸時代にゲンジボタル・ヘイケボタルの併称があった可能性は低い。

小西正泰は1992年に開催された「日本ホタルの会」のシンポジウムで、ゲンジボタルの名が江戸時代末期の1856年に成った飯室楽圃の『虫譜図説』に記されていることを報告した(日本ホタルの会, 1993)。楽圃は幕府御家人で、富山藩主前田利保(万香亭)を中心に作られた本草学・博物学研究会である「楮鞭会」に、福岡藩主黒田斉清(楽善堂)、旗本の馬場大助(資性)、武蔵孫左右衛門(石壽)らとともに参加した人である。したがって、もし楽圃の『虫譜図説』にゲンジボタルの名が記されているのであれば、少なくとも江戸時代末期には本草学者等にゲンジボタルの名が知られていたはずである。『虫譜図説』は印刷出版はされておらず、筆者は国立国会図書館蔵、早稲田大学古典籍総合データベースの写本各1種と、国立公文書館内閣文庫蔵の写本2種で確認したが、いずれもゲンジボタルの名は見られなかった。したがって、楽圃の原本には元々ゲンジボタルの表記はなく、小西が報告したものは後の書き込みである可能性が高い。

江戸時代の一般的な語彙としてゲンジボタル・ヘイケボタルの名称はなかったと考えられるが、地方名としてはどうか。

ゲンジボタルの地方名^{*16}にはウシボタル・オオボタル・イッスンボタル・クマボタル・ヤマボタル・コムソウボタル・オニボタル等が、ヘイケボタルの地方名にはコメボタル・ヌカボタル・マメボタル・ゴミボタル・カスボタル・ジャミボタル・ヤマイボタル・ユウレイボタル・ネンネボタル・ヒメボタル等が記録されている(神田, 1935; 南, 1961ほか)ものの、ゲンジボタル・ヘイケボタルの記録は見られない。もちろんすべての方言が記録されているわけではないが、ゲンジ・ヘイケという名はこれまで知られている地方名と比較すると異質な感じが強く、地方名にゲンジボタルの呼称があった可能性も低いと思われる。

おわりに

江戸時代には、ホタルを『源氏物語』や源頼政亡魂伝説と結びつけた作品が多数作られ、ホタルと源氏

が結びつけられたイメージができあがっていった。『誹風柳多留』の54篇（1811〈文化8〉年刊）には
美しい虫を出したと源氏方

の川柳も見られる。こうしたホタルと源氏の結びつけには、日本の文学や芸能・絵画等に与えた影響からみて『源氏物語』により多くを負っていると思われるが、源頼政の亡魂伝説もイメージの形成を後押ししたことは間違いない。

神田（1935）は「源氏螢，平家螢とゆう文字が対立して出ているのを私が知っているのわ，1901年6月に渡瀬庄三郎がホタルについて，東洋学芸雑誌にかいたものです。これだけでももちろん断定できないが，ゲンジボタルとヘイケボタルの名わ案外近ごろ，東京でできたのでわないかとも思います（原文ママ）」と，明治に入ってから学者によって名付けられたと推測している。神田の知る限り初出とされた渡瀬（1902）も「ちよつと，こゝに述べておきたいのは，螢の名称のことである，何故に日本に最普通な二種の螢に，源平二家の名を負はせたかは知らぬが，甚だ適当と思ふ」と述べていて，渡瀬がどこからこの名前を知ったのかは分からないままである。

近代生物学の和名としてゲンジボタル・ヘイケボタルと名付けた研究者が確定できない以上，由来についても断定的なことは言えない。しかし，江戸時代の文学でホタルが源氏と重ね合わせてイメージされることが少なくなかったことはこれまで見てきた通りである。こうした江戸文学のホタルに対する見方を受けて，*Luciola curciata* に和名を付ける時に“源氏ボタル”の発想が生まれたことは自然であったと考えられる。

[注]

- *¹: 和名にゲンジが入る昆虫は，モクゲンジニタイケアブラムシ（カメムシ目アブラムシ科）が存在するが，これはムクロジ科の落葉高木モクゲンジ（木患子）に由来する。
- *²: コウチュウ目のゲンゴロウ（ゲンゴロウ科）やテントウムシ（テントウムシ科），チョウ目のアゲハチョウ（アゲハチョウ科）などがこの例にあたる。
- *³: ヒメボタルは，現在は*Luciola parvula* の和名に用いられている。
- *⁴: 初出は1927年『土にいろ』4巻5号
- *⁵: 後に柳田は、『児童分類語彙』で「その源氏というのも実はゲンザすなわち山伏のことらしく」と“験師”をはぶいている。
- *⁶: 初出は『皇国時報』1936年11月～37年5月に連載された「古謡雑俎」。
- *⁷: 引用書は1917（大正6）年・文武堂刊の再版のようであるが，文武堂版に当たることはできなかった。
- *⁸: 『輔仁本草』に「螢火…一名夜光、一名夜行遊女、和名保多留」とあり，ホタルと遊女を結び付けたのはこれによるか。
- *⁹: この伝承は『平家物語』諸本には見えず，謡曲「頼政」で広く語られるようになったと思われる。佐成（1982）は「応永の頃このやうな伝説があったものか，謡曲作者の創案したものか」と述べている。
- *¹⁰: あやめの前は頼政の愛妾で，“ぬえ退治”の褒美として鳥羽院から賜った。
- *¹¹: 猪早太は頼政の郎党で，頼政の“ぬえ退治”にも従っている。「頼政追善芝」では，頼政は後日お家の再興に必要な人材と，わざと勘当して平家打倒の挙兵からはずしていた。
- *¹²: 説話『酒呑童子』で，頼光らと酒呑童子討伐に同行する藤原保昌のこと。平安中期の実在の貴族で，頼光と同様に藤原道長の家司を努めていた。『今昔物語』には盗賊袴垂との説話が見られ，女流歌人と泉式部と結婚した。
- *¹³: 源頼政は頼光の玄孫に当たる。頼政の弟，頼信が河内源氏の祖で，その子孫から頼朝が出た。
- *¹⁴: 岩波文庫本で確認。ただし，誤植の可能性も考えて早稲田大学古典籍総合データベースでも確認した。
- *¹⁵: 『分類俳句全集』を底本とする『分類俳句大観』で確認。

*16：他に宇治螢・瀬田螢・落合螢のように地名を冠したもの、鎌田川螢・赤川螢のように河川名を冠したものがあつた。

文 献

- 阿部秋生他校注・訳（1972）源氏物語 3 日本古典文学全集 14. 小学館.
- アニメ編集部（1979）ホタル博物誌. アニマ, (75):25. 平凡社.
- 荒俣 宏（1991）世界大博物図鑑第 1 卷 [蟲類]. 平凡社.
- 朝倉治彦編（1983・98）假名草子集成第 4・23 卷. 東京堂出版.
- 千葉 治校訂（1986）初代川柳選句集上. 岩波書店.
- 千葉徳爾（2005）[ホタル・民俗] の項. 世界大百科事典（改訂版）26. 平凡社.
- 江戸狂歌本選集刊行会編（1999-2000）江戸狂歌本選集第 5・7 卷. 東京堂出版.
- 藤沢 毅編（2012）翻刻『[螢／狩] 宇治奇聞』（尾道大学近世文学原典講読ゼミ翻刻）. 自刊.
- 速見春暁斎（1976）諸国図会年中行事大成. 日本庶民生活史料集成 22（本田次・山路興造編）. 三一書房.
- 石井研学校訂編（1901）万物滑稽合戦記 続帝国文庫第 32 卷. 博文館.
- 海音研究会編（1980）紀海音全集 8. 清文堂出版.
- 神田左京（1935）ホタル. 日本生物発光研究会.
- 近世文学書誌研究会編（1973）近世文学資料類従 古俳諧編（7）. 勉誠社.
- 北村季吟著・有川武彦校訂（1982）源氏物語湖月抄（下）増注 講談社学術文庫. 講談社.
- 喜多村信節（1979）喜遊笑覧 4（日本随筆大成編輯部編）日本随筆大成別巻. 吉川弘文館.
- 小林智昭校注・訳（1973）宇治拾遺物語 日本古典文学全集 28. 小学館.
- 小泉 弘他校注（1993）宝物集 閑居友 比良山古人靈託 新日本古典文学大系 40. 岩波書店.
- 小西正泰（1997）日本のホタル文学. インセクタリウム, 34(5):34-39.
- 小西正泰（1999）螢の語源学. DAGIAN, (34): 14-15. コスモ石油.
- 狂歌大観刊行会編（1983）狂歌大観第 1 卷 本編. 明治書院.
- 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター編（1989）日本産昆虫総目録. 九州大学農学部昆虫学研究室.
- 丸山一彦・小林計一郎（1970）一茶集 古典俳文学大系 14. 集英社.
- 正岡子規編（1992）分類俳句大観 5. 日本図書センター.
- 南 喜市郎（1961）ホタルの研究. 太田書店.
- 三石暉弥（1990）ゲンジボタル水辺からのメッセージ. 信濃毎日新聞社.
- 三石暉弥（2002）ほーほーホータル来い. 川辺書林.
- 宮武外骨（1923）面白半分. 半狂堂.
- 宮本三郎・今口栄蔵校注（1971）蕉門俳諧集 1 古典俳文学大系 7. 集英社.
- 森末義彰（1957）[螢狩] の項. 風俗辞典（森末義彰・日野西資孝編）. 東京堂出版.
- 宗政五十緒編（1997）都名所図絵を読む. 東京堂出版.
- 中村俊定・森川 昭校注（1970）貞門俳諧集 1 古典俳文学大系 1. 集英社
- 日本俳書大系刊行会編（1926）貞門俳諧集 日本俳書大系 6. 日本俳書大系刊行会.
- 日本ホタルの会編（1993）ホタルの文化誌（小西正泰公演記録）. ホタルと人里, (1):38-44. 日本ホタルの会.
- 西島孜哉編（1984・86）近世上方狂歌叢書 1・3・5. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華編（1990・92）近世上方狂歌叢書 14・17. 近世上方狂歌研究会.

- 西島孜哉他編（1994・96）近世上方狂歌叢書 20・23. 近世上方狂歌研究会.
- 西沢一風全集刊行会編（2004）西沢一風全集第4巻. 汲古書院.
- 野島寿三郎編（1991）歌舞伎・浄瑠璃外題辞典. 日外アソシエーション.
- 大島建彦（1974）御伽草子集 日本古典文学全集 36. 小学館.
- 小高敏郎他校注（1970）貞門俳諧集 2 古典俳文学大系 2. 集英社
- 岡田甫校注（1998-99）誹風柳多留全集（新装版）第4・6-7・9-10巻. 三省堂.
- 小沢博也（1972）螢と文学. みすず発行所.
- 佐成謙太郎（1982）謡曲大観第2・5巻（1930・31年の影印版）. 明治書院.
- 柴田哲孝（2003）源氏の霊と平家の霊. ゲンジボタル 週間日本の天然記念物動物編, (45):25. 小学館.
- 「新編国歌大観」編集委員会編（1985）新編国歌大観 3 私家集 I 歌集. 角川書店.
- 鈴木勝忠校訂（1986）雑俳集成第一期 1 元禄上方雑俳集. 東洋書院.
- 鈴木勝忠校訂（1987）雑俳集成第一期 4 享保江戸雑俳集. 東洋書院.
- 鈴木勝忠校訂（1990）雑俳集成第二期 1-2 江戸高点付句集 2-3. 自刊.
- 鈴木勝忠校訂（1990）雑俳集成第二期 3 伊勢冠付集. 自刊.
- 鈴木健一（1996）句題「小扇撲螢」考. 近世堂上歌壇の研究, pp211-215. 汲古書院.
- 高崎正秀（1971）古謡雑俎. 文学以前 高崎正秀著作集第2巻. 桜楓社.
- 竹内 若校訂（1943）毛吹草 岩波文庫. 岩波書店.
- 棚橋政博（2013）江戸に花開いた「戯作」文学. NHK 出版.
- 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編（1976）談林俳諧集 天理図書館善本叢書と書之部第39巻. 天理
大学出版部.
- 寺島良安（1987）和漢三才図絵 東洋文庫 471. 平凡社.
- 宿屋飯盛編（1778）古今狂歌袋. 国会図書館蔵（デジタル化資料）.
- 矢島 稔（1978）和名の由来. インセクタリウム, 15(6):54-55.
- 柳田國男（1969）蟻螂考. 定本柳田國男集第19巻, 339-369. 筑摩書房.
- 柳田國男（1949）分類児童語彙上巻. 東京堂書店.
- 山澤英雄校訂（1985）誹諧武玉川 3 岩波文庫. 岩波書店.
- 山澤英雄校訂（1986）誹風柳多留拾遺上. 岩波書店.
- 渡瀬庄三郎（1902）螢の話. 開成館.